

琉球病院

Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.90
2020. July

発行者 琉球病院事務部長
花本 成信

基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

令和2年度 那覇市医師会市民フォーラム

『沖縄県における飲酒を考える』

精神科医長 中井 美紀

令和2年7月4日、琉球新報ホールで那覇市医師会市民フォーラムが開催されました。そこで「沖縄県における飲酒を考える」をテーマに、「適正飲酒について～アルコール依存を予防するために～」という演題で講演いたしました。平成28年に報告された適正飲酒推進調査結果から沖縄県における飲酒状況、そしてアルコール関連問題、アルコール依存症について、アルコール依存症への進行を予防するための適正飲酒について話し、また、COVID19感染症による外出自粛、休業や失職による経済的不安等を背景とする飲酒量増加について、WHOや依存症関連の各学会から出されている注意喚起も紹介いたしました。

講演会の中では安里学弁護士による「アルコールに関連する法律問題」という演題でお話いただき、医療者と異なる法律家の立場から見たアルコール問題について、私自身も大変勉強になりました。

この講演会は一般市民が対象であったためアルコール依存症の治療ではなく、予防について重点を置いた内容にしました。しかし参加者のアンケートでは、アルコール依存症の当事者・家族の参加者も多くいらしたため依存症者への対応や治療法についても時間をとるべきであったと思います、今後の講演会で反映させていきたいと考えております。



当院では依存症治療専門病院としてアルコールを始めとする依存症治療を行っておりますが、このように一次予防、二次予防を目的とする保健活動として講演活動も行っております。

今回の那覇市医師会市民フォーラムは今後 YouTube 上でも公開される予定です。興味のある方はぜひご覧いただければと思います。

● 地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたくております。初診はじめ、受診については予約制となっております。

ご相談はお気軽に地域連医療携室までお問い合わせください。

院長

ふくじ やすひで
福 治 康 秀



1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。琉球大学 臨床pre。

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

416床

- ・精神 151床
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・認知症治療専門 56床
- ・アルコール依存症 54床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障害 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス 那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス[77番名護東線]浜田バス停下車徒歩3分

自動車 那覇市から40分沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15
(土・日・祝日以外)

TEL 098-968-2133(代)

内線 231・234

地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550

FAX 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

医師 木田 直也

クロザピンの治療状況



2010年2月から治療抵抗性統合失調症の患者様に対して、クロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は延べ311例になりました。2020年6月のCLZ導入は6例で、そのうちの4例は他の病院からご紹介をいただきました患者様（入院中3例、通院中1例）でした。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も少なくなり、隔離や身体拘束は解除できています。週に3回のCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマーの医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリルのご使用にあたって(<https://drs-net.novartis.co.jp/dr/product/clozaril/guide/>)でも動画が公開されていますのでご参照ください。

こども心療科

心理療法士 仲間 信也

県から委託を受けている「こどもの心の診療ネットワーク事業」の人材育成の一環で、他機関職員を研修生として受け入れ、診療陪席等を通して、こども心療科で行っている診療の実際やノウハウについて発信する取り組みを行っています。

今年度は、コロナウイルスの影響で受入開始が延期となっていました。様々な予防策を講じた上で7月から開始できる運びとなりました。現在、精神科勤務の医師・心理士・精神保健福祉士からの申込があり、少しでも多くの学びが提供できるよう準備しています。今後も、身近な地域で必要な支援が受けられる体制整備に向けて、取り組みを進めてまいります。この取り組みについてのお問合せは、こども心療科（心理療法士：仲間）までお願いいたします。

認知症医療

東Ⅲ病棟 副看護師長 知花 慎吾

太平洋を見下ろす小高い丘に建つ、当院の、一番背の高い最上階の見晴らしの良い場所に東Ⅲ病棟（認知症治療病棟）があります。入院患者の疾患は①アルツハイマー型認知症、②レビー小体型認知症、③脳血管性認知症の順に多く、平均年齢は78.8歳です。閉鎖病棟という閉鎖された空間で生活される患者さんのストレスを軽減する工夫を行っており、その一つが窓から見えるキラキラした金武ブルーの海を眺めながら患者さんと昔の話をすることです。認知症の症状はそれぞれ異なりますが、昔の自分を振り返っている患者さんはとても良い表情をされます。楽しかったこと、苦労したことなど昔話をすることで気持ちの安定やコミュニケーションの活性化につながり、認知症の患者さんの理解を深めています。

重症心身障がい医療

療育指導室長 金城 安樹

当院の重症心身障害病棟では、強度行動障害を呈す方の入院が増えてきており、数か月間の短期入院治療が行われています。強度行動障害とは噛みつき、頭突き、睡眠の乱れ、同一性の保持、多動や自傷行為等が通常考えられない頻度と形式で出現し、その養育環境では著しく処遇困難な状態とされます。当院では多職種と協働し個別の切迫したケースの課題に対して対応しています。短期入院により在宅や施設への移行が図られている事は、治療効果の実績であると共に新たなニーズへの対応力につながっているものと考えます。その方らしく生活ができる為に、訴えられない思いに敏感に対応し支援する姿勢を基本とし、より良い方向へと取り組んでまいります。

アルコール・薬物依存医療

北Ⅰ病棟師長 長 祥子

北Ⅰ病棟に依存症治療目的で入院されている患者様の平均年齢は50代半ばで、10代から80代の方が入院されます。入院期間は基本的には3ヶ月としていますが、お仕事やご家庭の事情などで短期間の入院を希望される方もおられます。現在、新型コロナウイルス感染症の影響もあり集団での活動は内容を減らしており、作業療法士や心理療法士が担当する認知行動療法、創作活動、運動療法に限っています。学習面については検討しているところではありますが個別のニーズに応じてフォローしています。

治療内容を変更したことが患者様の退院後の生活にどのように影響しているか評価が必要ですが、プログラム参加重視の治療体制から年齢や生活背景等に合わせた個別重視の治療体制に変更できてきているのではないかと考えています。より良い医療の提供を目指して取り組んでまいります。

包括的地域精神医療

訪問看護師長 嘉手苺 美智留

訪問登録者数は現在313名で、猛暑の中、北は国頭から南は浦添まで訪問に出向いています。新型コロナウイルスの感染予防のため、訪問看護をお断りされる方もおられ、体調の確認とともに事前に電話で伺って良いかもお尋ねするようにしています。この時期コロナウイルスだけでなく、室内が蒸し暑く熱中症の心配もある方もおられ、お薬の確認の他、限られた時間の中で身体面と精神面、作業所での様子などお話を伺い、できる限りのアドバイスをしています。

退院後や通院を継続しながら地域での生活がスムーズに送れるよう病状が安定し、自宅やグループホーム或いは単身アパートでの自立した生活が送れるようこれから夏本番に向けて身近に寄り添う支援者として訪問看護スタッフ一同支援を続けていきたいと思っております。

臨床研究部活動状況

『心神喪失者等医療観察法医療とclozapine ー琉球病院での臨床経験からー』 医師 木田 直也

「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」が施行されて14年が経過しました。医療観察法入院対象者の84%が統合失調症圏であり、重度の精神症状を持つ対象者が社会復帰を目指すためにclozapine（以下CLZ）は不可欠の治療薬となっております。琉球病院ではこれまでに42人の治療抵抗性統合失調症の入院対象者にCLZ治療を行いました。6か月後には対象者のBPRS（簡易精神症状評価尺度）合計スコア（平均値）は有意に18点低下し、BPRS合計スコア20%以上の改善例の割合も87%となるなど著名な効果を認めました。CLZ治療で対象者の幻聴、妄想、敵意などの陽性症状が軽減し、暴力などの問題行動が消失することで、多職種チームによる心理社会的治療も有効となります。日本のCLZ使用割合は国際的に低く、国内での地域差や施設間格差も大きく、各施設がCLZ治療の経験値に見合った様々な課題に取り組む必要があると考えられました。

臨床精神薬理23:43-52, 2020 抄録より抜粋